

学生の授業満足度と授業評価・学習評価・教員評価との関連 —在宅看護学の授業展開から—

吉川 峰子¹⁾ 廣部すみえ¹⁾ 齋藤 等²⁾

要 旨：本研究の目的は、在宅臨床看護学の授業展開における学生の授業満足度と授業評価、学習評価、教員評価との関連を分析し授業改善に役立てることである。A短期大学の看護学生50名を対象に質問紙調査を行い、相関分析および多変量解析を行った。その結果、授業満足度と各評価の合計得点との相関は授業評価 ($r=0.550$)、学習評価 ($r=0.614$)、教員評価 ($r=0.399$)であった。授業満足度と授業評価では7因子中5因子、学習評価では3因子、教員評価では1因子と相関が認められた。授業満足度を従属変数とし、各評価の合計得点を独立変数とする重回帰分析を行った結果、学習評価 ($\beta = 0.411$) と授業評価 ($\beta = 0.363$)が採択された。

学生は授業に概ね満足しているが、授業評価で点数の低かった「教員の話術」について改善する必要がある。また、重回帰分析の結果から、授業満足度は学習評価と強い関連があることが分かった。そのため、学生が授業に主体的に取り組むような学習支援が必要である。

【Key words】 授業満足度、授業評価、学習評価

緒 言

学生の授業満足度の向上のために授業改善に取り組む際、学生から授業評価を受けた結果を生かす方法が多い。しかし、授業は学生と教員の相互作用で成り立っている。授業の質だけを評価（以下、授業評価）するだけでなく、学生が主体的に学習に取り組む姿勢の自己評価（以下、学習評価）、教員の授業に取り組む姿勢（以下、教員評価）の影響も加味した検討が必要である。

牧野¹⁾は人間関係論の授業終了後、授業評価と自己評価、教員評価および学生の満足感を調査し、授業評価、学習評価、教員評価は相互に関連しあっていること、授業評価、学習評価、教員評価の高い学生は授業満足度が高いことを明らかにした。しかし、授業内容、形態によって評価が変化すると考えられ、改善しなければならない内容が合致しない可能性がある。そのため、担当する授業内容の特徴にあった授業評価、学習評価、教員評価の調査を行い、授業満足度に影響する要因を明らかにして、具体的な授業改善策をとる必要がある。

目 的

在宅臨床看護学における学生の授業に対する授業満足度と学生による授業評価、学習評価、教員評価との関連を分析し授業改善に役立てることを目的とする。

方 法

1. 調査対象

対象は在宅臨床看護学を受講したA短期大学（以下、A短大）看護学科50名。教員評価の対象教員は在宅臨床看護学担当教員1名。

2. 調査方法

自記式アンケート用紙を用い集合法で調査した。

3. 調査期間

平成23年3月～4月末日。

4. 調査内容

以下の項目から構成されている。

¹⁾ 福井医療短期大学 看護学科

²⁾ 福井医療短期大学 リハビリテーション学科
(受付日 2011年12月)

1) 授業評価

舟島²⁾らが開発した「授業過程評価スケール—看護学講義用—」(表1)は学生が評価者となって、提供された講義の過程を評価し、その結果を教員が解釈し、講義過程の改善に役立てる尺度である。7つの下位尺度38項目5件法(5:非常に当てはまる～1:全く当てはまらない)で作成されており、得点が高くなるほど、学生が講義の質を高いと評価していることを意味する。この尺度は信頼性、妥当性が確保されている。

2) 学習評価

先行研究^{1) 3) 4)}や授業中のアンケートを参考に、学生自身の授業への取り組みを自己評価できる内容32項目5件法(5:非常に当てはまる～1:全く当てはまらない)を作成した(表2)。

3) 教員評価

先行研究^{1) 5)}や授業中のアンケートを参考に7項目5件法(5:非常に当てはまる～1:全く当てはまらない)を作成した(表3)。

4) 授業満足度

全体的な満足度を問う1項目5件法(5:非常に当てはまる～1:全く当てはまらない)を作成した(表4)。

学習評価、教員評価、授業満足度についての質問項目の妥当性は、共同研究者および大学院修了で在宅看護学の教員経験者1名より確認した。

5. 倫理的配慮

本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得た。研究説明書を用い文書および口頭で、本研究への参加は自由であり、成績や今後の学習支援に一切影響しないこと、研究協力は辞退が可能なこと、学生はID番号を振って統計処理するため個人が特定されることはない

こと、データの管理は厳重であることを説明した。その後、同意が得られる学生には同意書を記入してもらい、クラス代表者が質問紙と共に封筒に回収、割り印をしてもらい、研究者が保管した。成績が確定した後、学生全員の目の前でクラス代表者に開封してもらった。尺度使用については開発者から文書で使用許諾を得た。

表1:「授業過程評価スケール—看護学講義用—」の質問項目

| 番号 | 質問項目 |
|------|------------------------------------|
| 1 | 講義の要点が分かりやすい展開であった。 |
| 2 | 講義のテーマ・目的がわかりやすい展開であった。 |
| 3 | 講義の結論が明解な展開であった。 |
| 4 | 事例や経験談は、多すぎること少なすぎることなかった。 |
| 5 | 抽象的な話に終始することのない講義であった。 |
| 6 | 講義内容は無駄や重複がなく、順序だてて整理されていた。 |
| 7 | 今後役に立つ内容の講義であった。 |
| 8 | 教員は看護師や看護を重要なものと価値づけていることが分かった。 |
| 9 | 教員から学生への一方的な講義ではなく学生も参加できた。 |
| 10 | 教員は学生の反応や理解を確認していた。 |
| 11 | 教員は学生の発言内容を取り上げて講義を進めていた。 |
| 12 | 教員は学生を尊重した態度で講義を展開していた。 |
| 13 | 学生への質問の量は多すぎること少なすぎることなかった。 |
| 14 | 学生への質問のタイミングや方法は適切であった。 |
| 15 | 資料・スライドなどの教材の量は適切であった。 |
| 16 | 教材を学生に示している時間は適切であった。 |
| 17 | わかりやすく工夫した教材を用いていた。 |
| 18 | 教材を見せたり、配ったりするだけでなく、説明を加えていた。 |
| 19 | 黒板やOHP、資料などの文字は読みやすかった。 |
| 20 | 資料・スライドなどの出典や参考文献を示していた。 |
| 21 | いくつかの教材を適切に組み合わせていた。 |
| 22 | 具体例・事例・経験談などで抽象的な内容が具体的にわかった。 |
| 23 | 難しいテーマや内容については、事例を示したり、具体的な説明があった。 |
| 24 | 専門用語やなじみのない用語に対し、わかりやすい説明があった。 |
| 25 | 教員自身の意見や考えを適度に示していた。 |
| 26 | ひとつの考え方として教員自身の意見を示していた。 |
| 27 | 講義の内容は表面的でなく心に響くものであった。 |
| 28 | 新鮮さを感じる講義であった。 |
| 29 | 豊富な内容を含んだ講義であった。 |
| 30 | その教員でしかできない講義であった。 |
| 31 | 難しすぎることやさしすぎることない授業展開であった。 |
| 32 | 専門用語やなじみのない用語は、多すぎること少なすぎることなかった。 |
| 33 | 講義のすすみ方は早すぎること遅すぎることなかった。 |
| 34 | 講義時間をむやみに延長したり、短縮したりすることはなかった。 |
| 35 | ノートを取るための時間はちょうど良かった。 |
| 36 | 教員の声は明瞭で聞き取りやすかった。 |
| 37 | 教員の話し方は単調ではなかった。 |
| 38 | 教員の話す速度は早すぎること遅すぎることなかった。 |
| 質問項目 | 1～8 下位尺度Ⅰ【講義過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達】 |
| 質問項目 | 9～14 下位尺度Ⅱ【学生への対応】 |
| 質問項目 | 15～21 下位尺度Ⅲ【教材の活用・工夫方法】 |
| 質問項目 | 22～26 下位尺度Ⅳ【具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度】 |
| 質問項目 | 27～30 下位尺度Ⅴ【内容の質と独自性】 |
| 質問項目 | 31～35 下位尺度Ⅵ【内容の難易度と時間的ゆとり】 |
| 質問項目 | 36～38 下位尺度Ⅶ【教員の話術】 |

6. 分析方法

統計処理にはSPSS11.5 for Windowsを使用した。記述統計量を算出後、学習評価32項目と教員評価7項目については、探索的因子分析を行い、構成因子を抽出した。信頼性はCronbachの α 係数を確認した。次に、授業満足度と授業評価、学習評価、教員評価の各要因の関連を見るために相関分析および多変量解析を行った。相関分析はピアソンの積率相関係数を算出し、多変量解析は重回帰分析のステップワイズ法で行った。なお、危険率を5%未満とした。

7. 在宅臨床看護学の授業概要・内容

在宅臨床看護学は看護学科2年生の後期30時間1単位の授業であり、ケアマネジメントとケアプランや在宅看護過程の展開を中心とした授業を行っている。在宅臨床看護学は専門基礎科目、専門科目全ての知識を活用して統合させるため、暗記している知識を使いこなせる知識に変化させる必要があることから、講義は16時間、演習は14時間と配分している。また、1事例の家族を取り上げ、30時間の授業を通して健康上・生活上の課題を抽出し、講義および演習で解決を図っていく学習の進め方をとっている。

表2：学習評価の質問項目

| 番号 | 質問項目 |
|----|-------------------------------------|
| 1 | 授業は真面目に出席した |
| 2 | 授業に遅刻をしなかった |
| 3 | 授業中、私語をしなかった |
| 4 | 授業中、居眠りをしなかった |
| 5 | 授業の内容は理解できた |
| 6 | 講義を受けることは楽しかった |
| 7 | 講義を受けることは辛かった |
| 8 | 演習は楽しかった |
| 9 | 演習は辛かった |
| 10 | この講義に意欲的に取り組んだ |
| 11 | この演習に意欲的に取り組んだ |
| 12 | 事前にこの授業のシラバス（講義概要）をしっかりと読んだ |
| 13 | 授業で自分が何を学ぼうとしているかを意識して授業に臨んだ |
| 14 | 積極的にノートを取った |
| 15 | 授業の内容と今までの学習を結びつけて理解した |
| 16 | 自己学習（個人での学習）では授業に関連のある本や資料を調べた |
| 17 | 講義・演習では分からないことは分かるまで調べたり、尋ねたりした |
| 18 | 演習は計画的に行った |
| 19 | 演習は前期の授業資料を活用した |
| 20 | 演習は他の教科のテキスト、資料を活用した |
| 21 | 演習は参考文献（論文）を活用した |
| 22 | 演習はメンバーシップが発揮できた |
| 23 | 演習は人任せだった* |
| 24 | 演習はメンバーに恵まれていた |
| 25 | 演習ではよくディスカッションした（自分の意見を言う、相手の意見を聞く） |
| 26 | 演習では達成感があった |
| 27 | この授業から学習意欲が触発された |
| 28 | 他学生ががんばっている姿に触発された |
| 29 | 私はこの授業の受講を下級生にも勧めたい |
| 30 | 私はこの授業の楽しさを下級生に伝えたい |
| 31 | 私はこの授業の辛さを下級生に伝えたい |
| 32 | この授業は今後の自分の実習・看護活動に役立つ |

* 逆転項目

表3：教員評価の質問項目

| 番号 | 質問項目 |
|----|------------------------|
| 1 | 担当教員は熱意がある |
| 2 | 担当教員はユーモアが感じられる |
| 3 | 担当教員は友好的である |
| 4 | 担当教員は信頼できる |
| 5 | 担当教員は怖かった |
| 6 | 担当教員は学生の学習に興味・関心を持っている |
| 7 | 担当教員は看護師モデルとして活用できる |

表4：授業満足度の質問項目

| 番号 | 質問項目 |
|----|-------------|
| 1 | この授業に満足している |

結 果

1. 記述統計量

研究に同意の得られた学生は40名（回収率80.0%）であり、有効回答は回答欠損がなかった40名（有効回答率100%）とした。

表5-1のとおりに、授業評価は190点満点中160.2（±

19.1）点であり、最も低かったのは教員の話術3.8（±0.8）点であった。

学習評価は表5-2のとおりに、160点満点中102.9（±11.6）点であり、最も低かったのは学習意義の探索的活動2.8（±0.5）点であった。

教員評価は35点満点中29.4（±3.0）点、授業満足度は5点満点中4.3（±0.8）点であった。

表5-1：授業評価項目の記述統計量

| 因子番号・下位因子 | 平均値±標準偏差 | 先行研究の評価基準 | |
|---------------------------|----------------|-------------|-------------|
| | | 高得点領域 | 中得点領域 |
| 授業評価（合計得点） | 160.2±19.1/190 | 163.6～190.0 | 121.1～163.5 |
| 1 講義過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達 | 4.4±0.5 | 4.0～5.0 | 2.7～3.9 |
| 2 学生への対応 | 4.1±0.7 | 4.3～5.0 | 2.4～4.2 |
| 3 教材の活用・工夫方法 | 4.3±0.6 | 4.4～5.0 | 2.9～4.3 |
| 4 具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度 | 4.3±0.7 | 4.9～5.0 | 3.4～4.8 |
| 5 内容の質と独自性 | 4.2±0.7 | 4.8～5.0 | 3.1～4.7 |
| 6 内容の難易度と時間的ゆとり | 4.2±0.5 | 4.4～5.0 | 2.9～4.3 |
| 7 教員の話術 | 3.8±0.8 | 5.0 | 3.5～4.9 |

表5-2：学習評価、教員評価、授業満足度評価項目の記述統計量

| 因子番号・下位因子 | 平均値±標準偏差 |
|---------------|----------------|
| | |
| 学習評価（合計得点） | 102.9±11.6/160 |
| 1 課題達成への手応え | 4.0±0.7 |
| 2 学習意義の探索的活動 | 2.8±0.5 |
| 3 授業に臨む姿勢 | 4.3±0.6 |
| 4 演習への取り組み | 3.9±0.6 |
| 5 楽しんで理解できた実感 | 3.4±0.7 |
| 教員評価（合計得点） | 29.4±3.0/35 |
| 1 親密性 | 4.7±0.5 |
| 2 熱意・信頼 | 4.4±0.6 |
| 総合満足度 | 4.3±0.8/5 |

2. 学習評価の構成因子

学習評価32項目について、探索的因子分析を行った。因子抽出法には主因子法を用い、因子数は、固有値1以上の基準を設け、バリマックス回転を行った。次に、各項目のうち、因子負荷量が0.40に満たなかった8項目を削除後、再度因子分析を行い、因子解釈を考慮したうえで5因子24項目を学習評価として採用した。

第1因子は「課題達成への手応え」、第2因子「学習意義の探索的活動」、第3因子「授業に臨む姿勢」、第4因子「演習への取り組み」、第5因子「楽しんで理解できた実感」と命名した。各因子のCronbachの α 係数は24項目全体で $\alpha = 0.871$ 、各因子の中で最も低い値は第4因子の0.504、他の因子は0.638～0.864であった

（表6カッコ内）。 α 係数は1に近いほど内的整合性は高く、グループレベルの比較だけなら0.60あれば許容しうる範囲である⁶⁾。第4因子「演習への取り組み」は0.504と低かったが、授業の約半分を演習に費やしており、評価に必要な因子であるという判断に至ったため、採用することとした。

3. 教員評価の構成因子

教員評価7項目について学習評価と同様の手続きで探索的因子分析を行った結果、2因子5項目を教員評価として採用した。第1因子は「親密性」、第2因子は「熱意・信頼」と命名した。Cronbachの α 係数は共に $\alpha = 0.756$ 以上であった（表7）。この結果から、これら質問項目は教員の特性を一貫して測定できる事を意味している。

表6：学習評価の因子分析（主因子法：バリマックス回転）

n=40

| 因子・(Cronbach's α 係数) 質問番号・評価内容 | I | II | III | IV | V | 共通性 |
|---|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 第 I 因子：課題達成への手応え ($\alpha=0.864$) | | | | | | |
| 26 演習では達成感があった | 0.785 | 0.225 | -0.002 | 0.048 | -0.122 | 0.685 |
| 10 この講義に意欲的に取り組んだ | 0.713 | 0.039 | 0.145 | 0.013 | 0.297 | 0.619 |
| 11 この演習に意欲的に取り組んだ | 0.710 | 0.267 | 0.040 | 0.268 | 0.088 | 0.657 |
| 8 演習は楽しかった | 0.691 | 0.101 | 0.206 | -0.194 | 0.226 | 0.619 |
| 25 演習ではよくディスカッションした（自分の意見を言う、相手の意見を聞く） | 0.660 | 0.081 | -0.162 | 0.346 | -0.347 | 0.709 |
| 27 この授業から学習意欲が触発された | 0.586 | 0.254 | 0.294 | -0.151 | 0.221 | 0.566 |
| 28 他学生ががんばっている姿に触発された | 0.513 | 0.232 | 0.395 | -0.180 | 0.058 | 0.508 |
| 23 演習は人任せだった | 0.488 | -0.031 | 0.091 | 0.105 | 0.045 | 0.260 |
| 22 演習はメンバーシップが発揮できた | 0.477 | 0.127 | 0.303 | 0.438 | -0.129 | 0.543 |
| 第 II 因子：学習意義の探索的活動 ($\alpha=0.839$) | | | | | | |
| 15 授業の内容と今までの学習を結びつけて理解した | 0.217 | 0.839 | 0.138 | 0.211 | 0.140 | 0.835 |
| 17 講義・演習では分からないことは分かるまで調べたり、尋ねたりした | 0.199 | 0.715 | -0.056 | -0.139 | 0.092 | 0.582 |
| 13 授業で自分が何を学ぼうとしているかを意識して授業に臨んだ | 0.131 | 0.702 | 0.028 | -0.144 | 0.418 | 0.707 |
| 12 事前にこの授業のシラバス（講義概要）をしっかりと読んだ | -0.086 | 0.623 | -0.105 | 0.276 | -0.130 | 0.500 |
| 16 自己学修（個人での学習）では授業に関連のある本や資料を調べた | 0.251 | 0.603 | 0.181 | 0.066 | 0.103 | 0.474 |
| 第 III 因子：授業に臨む姿勢 ($\alpha=0.772$) | | | | | | |
| 1 授業は真面目に出席した | 0.240 | -0.001 | 0.814 | 0.095 | 0.109 | 0.742 |
| 3 授業中、私語をしなかった | -0.018 | -0.001 | 0.787 | 0.140 | 0.110 | 0.651 |
| 2 授業に遅刻をしなかった | -0.020 | 0.009 | 0.556 | 0.079 | 0.074 | 0.321 |
| 14 積極的にノートを取った | 0.260 | -0.006 | 0.533 | -0.030 | 0.016 | 0.353 |
| 4 授業中、居眠りをしなかった | 0.156 | 0.428 | 0.512 | -0.134 | -0.135 | 0.506 |
| 第 IV 因子：演習への取り組み ($\alpha=0.504$) | | | | | | |
| 20 演習は他の教科のテキスト、資料を活用した | -0.046 | -0.094 | 0.222 | 0.757 | 0.312 | 0.730 |
| 24 演習はメンバーに恵まれていた | 0.288 | 0.017 | 0.017 | 0.512 | -0.147 | 0.368 |
| 19 演習は前期の授業資料を活用した | -0.094 | 0.356 | -0.040 | 0.471 | 0.146 | 0.380 |
| 第 V 因子：楽しんで理解できた実感 ($\alpha=0.638$) | | | | | | |
| 5 授業の内容は理解できた | 0.065 | 0.162 | 0.084 | 0.019 | 0.672 | 0.535 |
| 6 講義を受けることは楽しかった | 0.261 | 0.153 | 0.141 | 0.346 | 0.551 | 0.490 |
| 固有値 | 4.106 | 3.106 | 2.715 | 1.886 | 1.527 | |
| 寄与率 (%) | 25.304 | 9.663 | 8.570 | 7.297 | 4.748 | |
| 累積寄与率 (%) | 25.304 | 34.967 | 43.537 | 50.833 | 55.582 | |

表7：教員評価の因子分析（主因子法：バリマックス回転）

n=40

| 因子・(Cronbach's α 係数) 質問番号・評価内容 | I | II | 共通性 |
|--|--------|--------|-------|
| 第 I 因子：親密性 ($\alpha=0.796$) | | | |
| 2 担当教員はユーモアが感じられる | 0.903 | 0.320 | 0.917 |
| 3 担当教員は友好的である | 0.574 | 0.388 | 0.480 |
| 7 担当教員は看護モデルとして活用できる | 0.519 | 0.362 | 0.400 |
| 第 II 因子：熱意・信頼 ($\alpha=0.756$) | | | |
| 4 担当教員は信頼できる | 0.452 | 0.802 | 0.848 |
| 1 担当教員は熱意がある | 0.258 | 0.688 | 0.541 |
| 固有値 | 1.757 | 1.631 | |
| 寄与率 (%) | 43.318 | 5.085 | |
| 累積寄与率 (%) | 43.318 | 48.403 | |

4. 授業満足度と授業評価、学習評価、教員評価との関係
授業満足度と授業評価、学習評価、教員評価との相関を算出した。授業満足度と各評価には正の相関を認め、特に学習評価との間に ($r=0.614$, $p<0.001$) 強い正の相関を認めた (表8)。

授業満足度と授業評価下位尺度の相関では、第3因子「教材の活用・工夫方法」($r=0.642$, $p<0.001$)、第

2因子「学生への対応」($r=0.595$, $p<0.001$) が強い正の相関を認め、「内容の難易度と時間的ゆとり」、「具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度」、「内容の質と独自性」の順に5つの因子と正の相関が認められた。相関係数が最も低かったのは「教員の話術」($r=0.266$, $p=0.097$) であった。(表9)。

表8：授業満足度と授業評価、学習評価、教員評価との関係

| | (Pearsonの積率相関係数) | |
|------|------------------|----------|
| | 満足度 | 有意確率 |
| 相関係数 | | |
| 授業評価 | 0.550 | 0.000*** |
| 学習評価 | 0.614 | 0.000*** |
| 教員評価 | 0.399 | 0.011* |

***p < .001 **p < .01 *p < .05

表9：授業満足度と授業評価下位尺度との関係

| 因子番号・下位因子名 | (Pearsonの積率相関係数) | |
|---------------------------|------------------|----------|
| | 満足度 | 有意確率 |
| 相関係数 | | |
| 1 講義過程のダイナミクスと講義の意義・価値の伝達 | 0.183 | 0.258 |
| 2 学生への対応 | 0.595 | 0.000*** |
| 3 教材の活用・工夫方法 | 0.642 | 0.000*** |
| 4 具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度 | 0.442 | 0.004** |
| 5 内容の質と独自性 | 0.326 | 0.040* |
| 6 内容の難易度と時間的ゆとり | 0.508 | 0.001** |
| 7 教員の話術 | 0.266 | 0.097 |

***p < .001, **p < .01, *p < .05

表10：授業満足度と学習評価下位因子との関係

| 因子番号・下位因子名 | (Pearsonの積率相関係数) | |
|---------------|------------------|---------|
| | 満足度 | 有意確率 |
| 相関係数 | | |
| 1 課題達成への手応え | 0.337 | 0.033* |
| 2 学習意義の探索的活動 | 0.394 | 0.012* |
| 3 授業に臨む姿勢 | 0.065 | 0.689 |
| 4 演習への取り組み | 0.077 | 0.637 |
| 5 楽しんで理解できた実感 | 0.449 | 0.004** |

***p < .001, **p < .01, *p < .05

表11：授業満足度と教員評価下位因子との関係

| 因子番号・下位因子名 | (Pearsonの積率相関係数) | |
|------------|------------------|--------|
| | 満足度 | 有意確率 |
| 相関係数 | | |
| 1 親密性 | 0.300 | 0.060 |
| 2 熱意・信頼 | 0.329 | 0.038* |

***p < .001, **p < .01, *p < .05

表12：授業満足度の影響要因（重回帰分析：ステップワイズ法）

| 従属変数: 授業満足度 | | |
|-----------------------------|---------|-------|
| 採択された独立変数 | β | 有意確率 |
| 学習評価 | 0.411 | 0.005 |
| 授業評価 | 0.363 | 0.013 |
| R^2 | | 0.437 |
| 投入した変数: 授業評価、学習評価、教員評価の合計得点 | | |

授業満足度と学習評価下位尺度の相関では、「楽しんで理解できた実感」($r = 0.449$, $p < 0.01$) がやや強い正の相関を認め、「学習意義の探索的活動」、「課題達成への手応え」の順に3つの因子とやや弱い正の相関が認められた(表10)。

授業満足度と教員評価下位尺度では、第2因子「熱意・信頼」($r = 0.329$, $p < 0.05$) 弱い正の相関が認められた(表11)。

5. 授業満足度に影響を及ぼす要因

授業満足度を従属変数とし、授業評価、学習評価、教員評価の合計得点を独立変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。採択された独立変数は学習評価($\beta = 0.411$)、授業評価($\beta = 0.363$)であり、決定係数は $R^2 = 0.437$ であった(表12)。 β 値は1に近いほど従属変数に対する独立変数の影響が大きいことを意味している。決定係数 R^2 は一方の変数から他方の変数を予測する説明力であり、1に近いほど説明力が高いことを意味する。従属変数に対する独立変数の影響の強さを比較したい場合、決定係数の値は0.5より小さくても分析に耐えうる⁷⁾。

考 察

1. 授業評価、学習評価、教員評価の評価得点と課題

1) 授業評価

舟島²⁾らの授業の質評価基準によると合計得点の高得点領域は164点以上、中得点領域は122点から163点、低得点領域は121点以下であり、本授業評価の総合得点160.2点という結果(表5-1)は、A短大の学生は授業の質を普通と評価していることになる。そのため、授業改善によって更なる質の向上を目指す必要があることが明らかになった。特に改善を要する項目は、下位因子で平均得点が最も低かった「教員の話術」である。この項目は、教員の発話速度や発話明瞭度を評価しており、今後の授業において話す速さを遅くし、その分はしっかり発音する必要がある。

2) 学習評価

学習評価で平均得点が最も低かったのは、「学習意義の探索的活動」であった(表5-2)。これは、自己学習の動機づけが出来ておらず、探索的活動方法が充分には理解できていないことを示唆する。そのため、自己学習に対する動機づけと探索的活動方法の具体的

な指導が必要である。例えば、本授業は既習学習のどの科目と結びついているか、自己学修に役立てるためのシラバスの活用術などを授業ごとに説明し、どのようなテキスト・参考文献を活用したら良いかや本授業の学習目標を明確に提示するなど、意識付けできるような指導である。

3) 教員評価

教員評価は、2因子共に4.4点以上の高い評価であった(表5-2)。学生達が恥ずかしがらずに何度でも質問できる雰囲気作りと場の提供が、コミュニケーション機会を増加させ、教員に対する親密性の評価を高めたものと思われる。また、授業初回に教員も授業で守るべき態度を公言、実行すること、授業において在宅看護の意義を伝達することで、信頼、熱意の評価を高めたのではないと思われる。

2. 授業満足度に関連する要因と有効な改善策の検討

授業評価、学習評価、教員評価を高く評価している学生は在宅臨床看護学の授業に満足していた。そのため、学生の授業に対する授業満足度の向上を目指すには、授業の質改善のみに注目するのではなく、学生が主体的に学習できるような支援や教員の特性も合わせて改善する必要がある。

1) 授業満足度と授業評価

授業満足度と授業評価7因子との相関分析を行ったところ、「教材の活用・工夫方法」、「学生への対応」の2因子に強い正の相関が認められた(表9)。この結果は、教材の適切な量や理解を促す工夫、適宜教材を活用して理解を促す説明を加えた授業であると感じている学生ほど授業満足度が高く、また、学生が授業に参加できるよう発言する機会を増やし、学生が発言した内容を生かして授業を展開していたと感じる学生ほど授業満足度が高いことを示している。そのため、用いる教材を吟味すること、理解を促す工夫を行い活用すること、学生が主体的に授業に参加できる授業展開を構築することが必要である。

2) 授業満足度と学習評価

授業満足度と学習評価との相関分析の結果、「楽しんで理解できた実感」、「学習意義の探索的活動」、「課題達成への手応え」が高い学生ほど授業満足度が高かった(表10)。そのため、授業時間中だけでなく、授業期間中は、学生の知識の定着度を確認し、定着のレベルに応じて探索的活動の方法や資料の所在を提示して

探索的活動を支援する必要がある。また、学生の自己学習内容を把握し、不足している内容を補足して知識の統合を促し、理解を深め、学ぶ楽しさを実感できるような支援をする必要がある。

3) 授業満足度と教員評価

授業満足度と教員評価との相関分析の結果では、教員の「熱意・信頼」を高く評価する学生は授業満足度が高かった(表11)。澤田³⁾は、学習や理解を通じて能力を高めたいという達成目標が高い学生ならば誰でも授業満足度が高いわけではなく、教員の授業に対する取り組みとの相互作用の上に修得感や満足度が高められると述べている。そのため、教員の授業に取り組む姿勢から授業満足度を高めるには、教員から学生へ積極的にコミュニケーションを図り、学生が感じる授業難易度や理解の程度を把握し、学生の意見を反映させて授業に取り組む必要がある。

4) 授業満足度に影響する要因

授業満足度に影響する要因を検討するため重回帰分析を行った結果、学習評価と授業評価が採択された(表12)。 β 値は学習評価の方が高く、授業に対する授業満足度は、学習評価に強い関連があることが明らかになった。今後、在宅臨床看護学の授業満足度を高める授業改善案として、授業の質、教員特性はもちろんのこと、学生が楽しんで理解できたと実感できるよう、授業期間中の学習探索的活動の支援を行い、課題解決に向けて達成感が得られるような学習支援を重点的に行っていく必要がある。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究結果は授業形態に影響を受けることから他の授業科目に一般化出来ない。また、本研究では先行研究や授業アンケートから学習評価項目、教員評価項目を抽出して検討を試みたが、今後さらに評価項目を吟味し、アンケート項目をできるだけ少なくして評価ができるよう洗練していくことが課題である。

本研究の一部は第37回日本看護研究学会学術集会で発表した。

結 論

在宅臨床看護学の授業改善について以下の示唆を得た。

1. 授業満足度には授業評価, 学習評価, 教員評価が関連している。そのため, 授業の質のみならず, 学生への学習支援, 教員の授業に取り組む姿勢の改善も必要である。
2. 授業の改善項目は「教員の話術」であり, 話す早さ, 発話明瞭度を改善する必要がある。
3. 授業満足度に強く影響する要因は学習評価であり, 学生の主体的な学習を重点的に支援する必要がある。

文 献

- 1) 牧野幸志: 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係—専門必修科目「人間関係論」の場合—。高松大学紀要 2000; 35: 17-31.
- 2) 舟島なをみ, 杉森みどり: 看護学教育評価論。第1版, 文光堂, 東京, 2002, 29-37.
- 3) 澤田忠幸: 達成目標が学生による授業評価に及ぼす影響。愛媛県立医療技術大学紀要 2005; 2: 1-8.
- 4) 中野良哉: 学生による授業評価と達成動機の関係。高知リハビリテーション学院紀要 2005; 7: 1-9.
- 5) 三宅幹子, 森田愛子, 小嶋佳子ら: 学生による授業評価と自己評価, 当該授業に対する意欲・期待, 及び成績の関係 —教職必修科目「生徒指導論」の場合—。広島大学大学院教育学研究科紀要 2001; 50: 405-414.
- 6) Denise F. Polit, Bernadette P. Hungler: NURSING RESEARCH Principles and Methods. 第1版, 医学書院, 東京, 2005, 246.
- 7) 石井秀宗: 統計分析のここが知りたい。第1版, 文光堂, 東京, 2007, 200.